

# 武者小路実篤「友情」の青少年受容

——国語教科書と児童書、サブカルチャーをめぐる——

園 田 若 瑳

はじめに

前号に掲載した「武者小路実篤「友情」受容史——読者層の変遷——（一）」で論じたように、武者小路自身は読者を武者小路と志賀の関係を知っている人物だと仮定して執筆した可能性が高い。ウンベルト・エーコはテキストと想定される読者の関係性について、次のように述べている。

すでに述べたとおり、テキストは読者の共同作業を自らの顕現化の条件として要請する。次のように言い換えたほうがよいかもしれない。テキストとは、その解釈の運命が、自らの生成メカニズムに属するはずの所産なのだ。つまりテキストを生成するとは、他者の動きの予想が組み込ま

れた戦略を顕在化させることを意味するのだ——ちょうど他方ではあらゆる戦略においてと同様に。（中略）

この点で結論は単純であるように思われる。そのテキスト戦略を組織するために、作者は、彼が用いている表現に内容を付与する。一連の能力（コードの認識」というよりもっと広い表現）にかかわらねばならない。彼は、自分がかかわる能力の総体が、その読者がかかわるのと同じであると想定しなければならないのだ。したがって彼は、作者たる自分が考えていたとおり、テキストの顕在化に共同作業しうるモデル読者を予想するだろう。このモデル読者は、作者が生成（テキストの）においてふるまったのと同じように、解釈においてふるまうものと予想されるだろう。

「友情」における「モデル読者」とは、作中から野島と大宮の関係性を切り取って現実の武者小路と志賀の関係性を当てはめることができた読者である。この武者小路が想定した読者と実際の読者層は一致したのか、という問題は、この論文の一つの論点であり、前回から引き続き検討したい。

前回の論文では、「友情」の創作にあたって武者小路によって意識されていた読者像と、その読者像を想定した背景を検討し、次に「友情」が昭和二〇年代以降の若者の性道徳観念の退廃という社会的言説に後押しされて読者を得ていった過程を考察した。

しかし武者小路実篤「友情」は、昭和から平成への改元を境に急速に市場から姿を消し、それに伴って知名度も下がっている。その背景には出版業界の不況や、全集類の刊行の減少があり、たまたま「友情」の場合はその境が元号の改元に重なったというべきだろう。本論では、特に若年層を中心に多くの読者を得ていた「友情」が新たな読者を獲得し、そしてその読者層を失った経緯について、昭和三十年代以降の受容に焦点を当て考察する。

## 第一節 女子学生と児童書を巡って

本節では「友情」の昭和三〇年代以降の受容を知る上で興味深い史料として、一九六一（昭和三十六）年に刊行された雑誌「群像」第十六卷十二号に掲載された太田三郎「女子学生は何

を読んでいるか」と一九六三（昭和三十八）年十一月十日発行の「昭和女子大学 学報」に掲載された読書調査を検討する。この二つのアンケートはほぼ同時期に女子大学生を対象に調査を行っているが、まず前者の太田の調査では以下の項目を調査している。

### 一、感銘をうけた本（一冊だけ記入）

1 高校時代    2 大学入学後

（日本及び東洋を含む外国）

### 二、好きな作家（一人だけ記入）

1 高校時代    2 大学入学後

（日本及び東洋を含む外国）

### 三、一及び二の本や作家を読むようになった動機

（高校時代及び大学入学後について）

アンケートを女子学生に絞ったことについて、太田は「……といふのは、ごく一部の大学をのぞけば、各大学とも外国文学、とくに英文科や仏文科、また国文科では、この数年来、女子学生がだんだん多数をしめてきたため、共学とは名ばかりで、現在は男子の学生は総数の一割か二割どまりになっている」と現状認識を語り、「こういう現状だから、文科の男女の学生を同数とらえて読書調査することは、少数を対象にしたものになってしまう。そこで筆者は女子学生だけを対象に選んで」アンケート

ト調査を行ったとする。対象としたのは熊本、福岡、神戸、京都、東京、仙台の女子大学あるいは其学の大学で、回収できたアンケートは「2千枚をこえた」としている。

太田は夏目漱石が好きな作家として最も票を獲得したことに  
ついて、漱石作品の中でも一八一人が「こころ」が好きな作品  
として挙げたことを報告する。「…現代の学生は「こころ」を  
よく読んでいる。友情と愛情の問題をあつかいながら、人間の  
誠実というものをテーマにしている点が若い人の心をひきつけ  
るのだろう。」と太田は分析しているが、「友情」もこの延長線  
上に位置づけられている。

同じような理由だとおもえるが、武者小路実篤がとくに  
高校時代に読まれている。その作品では「友情」が一番人  
気がある。この作品は理想化された恋人の像と、誠実な友  
情をあつかっている点に心をひかれるのだろう。ここにあ  
げた作家だけに関することではなく、アンケート結果全体を  
みわたすと、「こころ」とか「友情」という作品に見られ  
るような、誠実な人間の生活、愛情であれ友情であれ、ま  
た幸福な結果におちいろうと、誠実に生きてゆこうとする  
人間の生活を描いた作品は、女子学生の最大の関心の的だ  
といつてよい。

「誠実な友情」、「理想化された恋人の像」など、昭和二十二

年の亀井の書評以来確立された「友情」評はここでも有効だが、  
「…だがこの読書調査の結果からいえば彼女らは健全な傾向を  
しめしているといつてよい。人生を誠実に生きていく道を文学  
作品の中に求めているものが圧倒的な数である。」と、「こころ」  
や「友情」をやはり「健全」「誠実」というワードで語っていく。  
ここに「友情」に期待されていた女子学生の感想が窺える。

更に太田によればこのアンケートで日本の「作品として上位  
にあるもの順序通りに挙げると」、結果は夏目漱石「こころ」、  
島崎藤村「破戒」、倉田百三「出家とその弟子」、下村湖人「次  
郎物語」、武者小路実篤「友情」、太宰治「人間失格」になった  
という。

さらにひとつ注意したいことがある。この種のアンケー  
トに回答を記入するとき女らしい心理がはたらいているこ  
とだ。なにか「まじめ」なことをかかねばならないという  
気持ちから、彼女らは、自分がふだん胸におもっているこ  
とではなく、「女子大生らしい思慮」をはたらかせて回答  
を記入することは十分ありうることだ。実際には現役の作  
家をえらんで、記入する。雑誌の連載作品に夢中になつて  
いてもそれはかかないでよく。こういうことは、たとえ無  
記名のアンケートの回答をかくときにも、若い女性にはた  
らく心理だ。（中略）このアンケートの結果には、彼女ら  
が実際に思っていることと、それからもう一つ、彼女らが

それを立派な作家だと考えたいかという気持ち、この二つがまじりあっている。現実と彼女らの気持ちの調査の結果にでているとおもえば間違いがない。その意味ではやはり嘘の数字ではなくて、彼女らの作家や作品にたいする「総合的」な評価をしめていることになる。

太田のこの指摘によって「友情」が「女子大生らしい思慮」を働かせて選ぶ作品であり、武者小路を「立派な作家」と婉曲に位置づける。太田のアンケートで「友情」の読者層として想定されていたのは、誠実な友情にシンパシーを感じるであろう女子学生であった。

もう一つ昭和三十年代の女子学生の読書調査として、一九六三（昭和三十八）年十一月十日発行の「昭和女子大学学報」に掲載された読書調査がある。この読書調査は「約二百名」を対象に行われたもので、「一、今までに感銘を受けた本。」「二、感銘を受けた理由」「三、好きな作家」「四、今読んでいる本」「五、一ヶ月に何冊」「六、ベストセラーを読みますか？」「七、最近読んだベストセラー」の七つの項目が立てられている。このうち武者小路並びに「友情」に関係あると二、三について検討する。

一、今までに感銘を受けた本

「友情」（武者小路実篤）5 「心」（夏目漱石）5 「破戒」（島

崎藤村）4 「愛と認識の出發」（倉田百三）3 「出家とその弟子」（同）3 「次郎物語」（下村湖人）2 「暗夜行路」（志賀直哉）2、「風立ちぬ」（堀辰雄）2 その他

二、感銘を受けた理由

「友情」——親友についての根本的な面がよく出ている。男性味が溢れている。精神的な糧が得られる。

「ころ」——心理描写がすばらしい。

「破戒」——人種差別の問題について考えさせられるところが多い。

〈中略〉

三、好きな作家

芥川竜之介12、夏目漱石9、太宰治7、志賀直哉6、堀辰雄5、谷崎潤一郎3、吉川英治、武者小路実篤、石坂洋次郎、井上靖、島崎藤村が各々2という結果で、芥川、漱石は各科を通じて、太宰、堀辰雄は文科系に人気がある。

おおむね太田の調査と相似性が見られるが、「友情」が「ころ」と同票を得ている点は特筆される。後述の教科書での受容と同じように、昭和三十年以降「友情」と比較対象になったのは「ころ」であった。

一九六〇年代とえば、女子の大学進学率が大幅に上がり共学大学の、特に文学部では学生の過半数を女子が占めている状況がセンセーショナルな話題となり、「女子大生無用論」そし

て「女子大生亡国論」が取り沙汰された時期である。<sup>(1)</sup>そうした時代背景の中で「友情」は女子大生が「誠実な友情」を語る文学作品として位置づけられていく。当時の「友情」を受容する読者層の一部として女子学生が大きな存在になっており、そこに昭和三十年代の「友情」の「想定された読者」が窺え、また「実際に」女子学生は「友情」を受容していた。

第一節で論じたように武者小路の「代表作」としての地位を昭和三十年代に築いていた「友情」であるが、この昭和三十年代には武者小路が想定していた読者像と、実際に享受していた読者像が乖離していた。その武者小路にとって意外だった読者とは、上記のアンケートで対象にされていた「女子学生」である。『白樺叢書 武者小路実篤集』の「後書き」から四十年経った一九五五（昭和三十）年に武者小路は新潮社から刊行された『武者小路実篤全集 第五巻』に収録された「後書き」で「友情」に対して所感を述べているが、この文章は「友情」を考察する上で重要な史料と位置づけられてきた。<sup>(2)</sup>

この本に集められてある三つの小説（引用者注…「友情」、「愛と死」、「幸福な家族」）は、僕の小説の内が一番多くの人に読まれたものと思ふ。

友情は宮崎県の新しき村に居た時、大阪毎日にたのまれたいかと思ふが、何人かの人と同じ位の長さのものをたのまれたやうに覚えてゐる。

かいた時自分では乗気だったが、大して反響もなく、ほめられた記憶もない。単行本にした時、岸田劉生が特別にこつてい、表紙をつけてくれた事を喜んだことを覚えてゐる。この小説は勿論つくりもので、事実にモデルはないが、しかし自分のいろいろの経験が、いろいろの形になって出て来てゐるのは「或る男」を読んだ人にはわかると思ふ。

その後十何年かたつて、僕は不思議な噂を聞いた。それは何かの雑誌か新聞に、女学生の愛読書を調べた結果が出て居たが、その内に友情が二位を占めてゐたと言ふ事だった。この噂は僕には意外だつただけに嬉しく思つた。「友情」は岩波文庫に出て居たからではあつたが、そんなに読む人が居るのかと、消えていつたと思つたものが、又あらはれて来たやうな感じを受けた。誰もほめない、誰も何とも言はない、しかし読者から読者に傳はつて、又読まれるやうになつたのだと思つた。

「友情」の読者層は昭和三十年代には武者小路にとって意外だった「女学生」に変遷していた。<sup>(3)</sup>ここに武者小路が「友情」の執筆時に「想定していた読者」と「実際の読者」の乖離が見られる。

## 第二節 児童による「友情」の受容

女学生の次に「友情」の主な読者層となつたのは児童であつ

た。「友情」は昭和四十年を契機に次々と児童書に登場したからである。例えば『アイドル・ブックス・19 友情』（ポプラ社、昭和四十年）、『ホーム・スクール版／日本の名作文学11 友情』（偕成社、昭和四十三年）、『友情 新学社文庫5』（新学社、昭和四十三年）、『友情（ポプラ社文庫、A71）』（ポプラ社、昭和五十五年）、『日本の近代文学…名作への招待』（新学社、昭和五十八年）など、昭和四十年代～五十年代にかけて「友情」は児童向けの作品という認識も出版社の間で広まっていた。『友情 新学社文庫5』では、

…つまり読み終わったら、それっきりにしないで、感想や批評をまとめていってほしいのです。そういう態度が中学生としての正しい読書を身につけさせることになると思います。

とし、読者層を中学生と想定して「1 あなたはどう感じましたか」では同じく中学生の感想文が二編掲載されている。

偕成社、昭和四十年『友情 ジュニア版日本文学名作選15』では「(1) 作品は原作を全文収録し、表記は「現代かなづかい」「当用漢字」によりました。」とし、受容層を意識したテキストになっている。この「ジュニア版日本文学名作選」のコンセプトは以下のように書かれている。

#### ●刊行のことは

ジュニア版「日本文学名作選」は、明治以来の文豪の名作、及び、ひろく世の人びとの感動をあつめた作品の中から、若い読者の皆さんにふさわしい作品を精選収録いたしました。

ここでは婉曲に武者小路を明治以来の文豪に数え、「友情」を児童が読むにふさわしい作品として位置づけている。「友情」をこのように見なす児童向け書籍はこれだけでなく、「フレッシュな小学生・中学生に贈る必読の文学全集」を謳う「ジュニア版 日本文学9 友情」は「このシリーズは『ジュニア版世界の文学』の姉妹篇として企画され、近代日本の代表的作品を一家一冊にまとめました。」としている。ここで指摘したいのは「友情」が「若い読者の皆さん」、「フレッシュな小学生・中学生」、「中学生としての正しい読書を身につけさせる」など小中学生を対象とする書籍に多数収録されている点である。昭和四十年代に至って「友情」は小学生や中学生といった子どもの読める作品としての価値を得た。「友情」は明治以来の名作の位置づけとともに、「子どもの本の世界」の「教養主義」の一端として「友情」は教養の言説に取り込まれていく。

この問題について示唆的な史料として、先にも引用した『友情 新学社文庫5』がある。同書では「武者小路実篤『友情』の主題を明確にするために、中学生のあなたがたが教科書など

で知っている「友情」をあつかったものを二つあげてみましょう。」と述べ、吉野源三郎「君たちはどう生きるか」と太宰治「走れメロス」と比較し、「友情」に教科書の副読本としての性質を与えている点で特筆されるが、その発展的段階として次のように指導している<sup>⑥</sup>。

…中学生のあなたがたには、野島と杉子と大宮のような深刻な恋愛問題、恋愛を通しての人間の生き方というのは、まだじゅうぶん理解されないだろうと思うからです。そうして、いわば失恋した野島という青年が主人公で、杉子をめぐる恋愛がテーマでありながら、それでも、そのはげしい情熱のほどばしる恋愛、恋を失ったいたましい主人公の悲しみの奥底に、二人の青年のつよい友情があるのも、感想をまとめていく中に気づいてほしいと思うのです。

この史料でも「友情」と「愛情」を対立的なものと捉え、読者として想定している中学生にとって将来的な問題ととらえつつも、最終的に「友情」に重きをおき、そこに教育的価値を求めている。同書に掲載されている「ある中学生Aさん」と「ある中学生Tさん」の感想文を引用しよう。（最初のカッコは原文ママ）

☆「『友情』という題だし、先生にもすすめられて読んだ

のですが、わたしの考えている友情とはちょっと違っていました。たしかに友情が主題になっているとは思いますが、わたしには恋愛小説のようだと思われました。『君たちはどう生きるか』を読んだ時、コペル君を中心とする男の子たちの固い友情にたいへん感動を受けたのですが、この小説は、わたしたち中学生の考えている友情ではなく、主人公の男の人がある一人の女の人をめぐって失恋し、反対にその女の人が、主人公の親友を好きになって結婚してしまうという物語なので、どうしてもして友情という題がついたのかちよつとまよいました。よく考えているうちに、そういう立場になった親友同士が、結果としては友情を裏切ったかたちではありながら、やはり友人としてお互いにそれぞれの人間を尊重しながら生きぬいていくところから、この『友情』という題がついたのかなと考えました。

☆「友情なんていいながら、ほくには、野島と大宮の二人の関係はどうもピンとこない。（中略）」

こういうふうに、女の人と結婚する話がいってくると、ほくにはなんともいえないが、ふつうの友情という点から考えると、野島と大宮はどんなことがあっても、助けあい愛しあわなくてはならないのだと思う。この小説は、二人が裏切った結果で終わっている。おとなの友情と、ぼくたちの考える友情とはちがっているのだろうか。

次項で述べるように、実教出版の現代文教科書に掲載された際は「友情」の主題である「友情」と「愛情」を相対化し、「こころ」との比較やテキストの検討、他の学生との話し合いを通して指導するように指導書で示唆されていたが、『友情 新学社文庫5』では恋愛を「女の人と結婚する話がはいつてくると、ほくにはなんともいえない」などの感想に見られるように、愛情を読者にとっては「わからないもの」と定位し、「友情」を他人との友情を考える教材とするように指導している。ここに昭和四〇年代の「友情」を享受すると想定されていた読者、つまり児童に求められていたものが窺える。それは未だ「友情」については十分考えられるものの、「恋愛」についてはわからないと思考を放棄するような児童であった。

### 第三節 国語教科書のなかの「友情」

本項では「友情」と国語教科書の問題について検討したい。昭和三十年代～五十年代にかけて「友情」は秀英出版（収録は昭和三十三年、改訂三回）と実教出版（収録は昭和四十七年、昭和五十三年、改訂三回）が刊行した現代文の国語教科書に収録された。実教出版から刊行された『現代国語 三 三改訂版』（昭和四十七年）、『現代国語 三』（昭和五十年）、『現代国語 三 改訂版』（昭和五十三年）はいずれも「友情」の下編全編を採録している点は共通している。

本節ではこの国語教科書と「友情」に関して、二つの事を問

題としたい。第一に既に昭和二十二年の亀井の書評によって典型的な評価が確立していたとはいえず、なぜ「友情」に教材としての価値が求められたのだろうか。第二に教科書である以上は、そこに具体的な読者である生徒の学習経験、そしてこれまでの読書の経験が想定されているはずである。それを調査することによって、昭和四十年代の「友情」の受容について明らかにしたい。

上記の二つの間には同じ要因が指摘できる。その頃には高校の現代文の教科書に掲載される作品として定番化していた夏目漱石「こころ」の影響である。「こころ」は一九六二（昭和三十三年）年に筑摩書房刊行の『現代国語二』で国語教科書にはじめて掲載され、一九七〇年代には殆ど全ての教科書に採録されるようになった。同時に「下 先生の遺書」のうち「先生」の自殺前後の部分を抜粋するというパターンも固定化した。<sup>⑧</sup>「友情」が実教出版の教科書で掲載されるにあたって抜粋されたのは、下篇の杉子―大宮の往復書簡の部分と、最後の野島の慟哭の場面である。稲井は教材としての「こころ」において書簡部分が抜粋される事がパターン化したことについて、一部を抜粋することによって教科書に掲載された部分が「あたかも一本の小説のように見せた。」と論じているが、「友情」についても同様の事情があったと推測できよう。

一九七二（昭和四十七）年の指導書には「友情」について、「漱石の「こころ」と似た主題を持ちながら、結論は全く逆にな

る。人間の「自我」をきっぱりと肯定する作者の楽天的な人生観が、きわめて明快に打ち出されたすぐれた作品である。」と記述している。また同書での「指導法の例」では第五時（展開）の時間において、

「学習の手引き」七をあらかじめ示して、既習の夏目漱石の「こころ」と比較して各自の感想をまとめさせておく。  
 〈中略〉大宮と「こころ」のKを比較させ、それらの人物の人生観・恋愛観・友情観などについても十分に考えてみるように示唆し、個性とは何か、愛とは何か、友情とは何かといった問題について、十分に討議を尽くさせる。このようにして、「友情」を越えた自我の勝利を歌いあげたこの小説の主眼をしっかりと把握させるように導く。

と「こころ」を学習した経験を踏まえて「友情」を学習するカリキュラムが提示されている。また一九七八（昭和五十三）年の指導書では「友情」の構成について、以下のように述べられている。

まず「友情」の下編が往復書簡形式であることに着目したい。近代日本文学における書簡体小説といえば、夏目漱石の「こころ」が念頭に浮かぶが、この作品も強く影響を受けているといえる。上編は「こころ」の「先生と私」、

【図一】「友情」の教科書掲載概況（筆者作成）

| 教科書名        | 出版社  | 学年    | 出版年             | 掲載部分  |
|-------------|------|-------|-----------------|-------|
| 国語 三        | 秀英出版 | （未確認） | 昭和三年／<br>一九五七年  | （未確認） |
| 国語現代編 一     | 秀英出版 | （未確認） | 昭和三八年／<br>一九六三年 | （未確認） |
| 現代国語 三 三改訂版 | 実教出版 | 高校三年生 | 昭和四七年／<br>一九七二年 | 下編すべて |
| 現代国語 三      | 実教出版 | 高校三年生 | 昭和五〇年／<br>一九七五年 | 下編すべて |
| 現代国語 三 改訂版  | 実教出版 | 高校三年生 | 昭和五三年／<br>一九七八年 | 下編すべて |

下編は「先生と遺書」に添う。また、大正四年に書かれた有島武郎の「宣言」も終始往復書簡体で貫かれている。そしてこの構成法は漱石よりよほど強く白樺派の人々を刺激した。すなわち、内容から言えば、「こころ」の影響が強いが、近代書簡体形式の主流はむしろ白樺派によって形成されつつあったと言えよう。

双方の史料共に「友情」と「こころ」の関連について指摘しているが、ここに見られるのは「既習の夏目漱石の「こころ」、「近代日本文学における書簡体小説」といえば、夏目漱石の「こころ」が念頭に浮かぶ」といった「こころ」の読書・学習を前提にした解説である。ここに想定されている読者、つまり生徒とは、「こころ」を既に教科書で読んでおり、それを前提として「友情」を学習する読者である。しかしながら「友情」が「こころ」や「舞姫」「羅生門」のような「安定教材」とならなかった理由もここに求められるのではないだろうか。即ち、既に書簡体形式で「恋愛」と「友情」を主題としている「こころ」が掲載されている以上、似たような構成・主題を持つ「友情」がわざわざ教科書に掲載され学習される意義は薄い。

また、国語教科書に載る以上は自明のことではあるが、「山月記」と同じように「友情」にも「人格陶冶」が求められた。高等学校三年生における「友情」の学習に「4 小説を読んで、人生についての生きた知識を得、人間の生き方について学ぶ。」

「5 作者の人生や社会に関するものの見方、考え方、態度などについて考える。」といった道徳教育の価値が求められたのは、こうした戦後の国語教育が、道徳の教育をもになうという意識が教育者に存在したこと、また道徳の中でも青少年における男女恋愛のあり方、つまり性道徳の教育の必要性が増していたことが重要な要因となっている。

一九七八（昭和五十三年）に実教出版の指導書では「友情」が青年期の男性の友情と恋愛を描いた作品であるとし、「…高校三年生にとつては、一つは多かれ少なかれ一応は経過した問題であり、他はやがて当面するであろう将来の問題である。人生上の問題について具体的に考えさせるには、絶好の教材である。」と高校三年生の時期に「友情」を学習する意義を、高校生にとつて実際的な問題である「友情」と「恋愛」の問題に対する解決を導くものという観点から説明している。

田近洵一は「戦後の文学教育の実践の中には、文学による人間形成の目標を、何らかの倫理的・道徳的なものの習得に求める傾向がないわけではなかった」と指摘しているが、佐野幹は一九六三年以降の国語教科書（特に現代国語）について以下のように論じた。

「山月記」の指導書を用いた授業は、読解作業を通して、一方的に人間の在り方や生き方を押し付けるものであった。この形の授業が形成されたのが第三二期以降（一九六三年）

であることは、偶然ではない。読解指導が当時の経済界からの要請による能力主義の価値観に合致していることは言うまでもないが、この時期には、「期待される人間像」（一九六六）も中教審から答申された。人間としての在り方を国が規定しようとしたのである。「期待される人間像」は、「家庭を愛の場にする」と「仕事に打ち込むこと」「人間性の向上」を語っていた。：

「友情」を国語教科書に掲載したのがたつた二社であり、しかもそれは同時期ではないことを考えれば佐野の論が全て「友情」の教科書掲載に当てはまる訳ではないが、「友情」も「山月記」と同じように、その指導が「読解作業を通して、一方的に人間の在り方や生き方を押し付けるものであった」ことは間違いないだろう。

以上のように実教出版から出版された国語教科書において「友情」の読者、つまり生徒は「こころ」を既に何らかの形で読んでいる者であり、そうした生徒に「人格陶冶」を与えるための教材が「友情」であった。

#### 第四節 平成以降——サブカルチャーと「友情」

昭和五十年代～昭和末まで「友情」は年一回のペースで武者小路の選集に掲載されてきたが、平成以降の全集の刊行は『武者小路実篤全集 第五卷』（平成十年、小学館）のみであり、

全集類の発行の減少によって全集というメディアでの「友情」の受容はされなくなっている。現在は岩波文庫、新潮文庫、集英社文庫の三種類の文庫でしか「友情」を享受することはできない。

しかし、一方で「友情」は新たな読者を得ていた。平成以降の「友情」の受容で特筆されるのが、エンターブレイン社のレーベル・ファミ通文庫から刊行された、野村美月による『文学少女』シリーズの第三巻『文学少女と繋がれた愚者』である。『文学少女』シリーズは古今東西の『名作』を翻案しミステリーに仕上げるという「翻案小説」のシリーズであり、その中の一つとして「友情」が取り上げられている。ここにおける「友情」は日本文学における『名作』であると位置づけられているのだ。同作品は二〇一〇（平成二十二年）年にドラマCDとしても販売された。同シリーズでは、探偵役で「異様に本好きなのと、その本を愛するあまりばりばり食べてしまう以外は、古風で清楚なお嬢さんにも見えないこともない」第一章と形容される『文学少女』・天野遠子と、語り手であり、遠子の後輩である井上コノハが学園の内外で起きる事件を解決するプロットになっている。主人公である遠子は「友情」について何度も言及するが、『第二章 レモンクッキーは青春の味』では以下のように述べている。

「大宮の秘めた想いと、杉子の大宮への恋心が、ちゃんと

お客さんに伝わるように書いてね。野島と大宮と、杉子——この甘酸っぱい三角関係が、このお話の、一番美味しいところなんだから」

〈中略〉

「野島と大宮の友情も、たっぷりこつてりお願いね。ななせちゃんも言ってたけど、外国へ向かう前、駅に見送りに来た野島に、杉子への気持ちを押し殺しながら『僕は君の幸福を祈っているよ』と告げるシーンは、感動的だわ。熱いお豆腐に、舌がビリッと、火傷しそうなような痛みがあるわ」：

遠子は文字を印刷した紙しか味覚が分からない特殊体質と設定され、そのため傍線部のように「友情」の感想を食物のように語るのがあるが、「友情」における野島と大宮の関係性、特に恋愛小説としての「友情」に重点を置いた語りをしている。さらに前述したように、二章のタイトルは「レモンクッキーは青春の味」である。ここで「友情」は青春を描いた恋愛小説と解釈されている。ファミ通文庫はライトノベルを刊行するレーベルである。つまり、この書籍で想定されていた読者はライトノベルを愛読する層、つまり「オタク」だ。東浩紀はいわゆる「オタク」を要素で構成されるキャラを感受できる層であると論じた。<sup>16)</sup>

ライトノベルの作家と読者は、戦後日本のマンガやアニ

メが育てあげてきた想像力の環境を前提としているために、特定のキャラクターの外見的特徴（さきほどの引用箇所では「眼鏡」「小柄」といった表現）がどのような性格や行動様（「神秘的な無表情」「魔女っ娘」）に結び合わされるのか、かなり具体的な知識を共有している。（後略）

天野遠子も東浩紀が指摘するような「特定のキャラクターの外見的な特徴」によって構成された「キャラ」である。その証左に、表紙と挿絵の天野遠子は三編み・セーラー服・灰色の髪・鳶色の目といった要素で構成されている。東は「オタク」とは「萌え要素のデータベース」を共有できる者であり、「データベースの水準がないかぎりにおいて本質的にオタク的なものではない<sup>17)</sup>」と定義する。換言すると「オタク的デザインを借りる」ということと、その背後にある文化的な構造を理解することのあいだ<sup>18)</sup>には「差異」があるというのである。この論に従えばライトノベルを、そして「文学少女」シリーズを受容できるのは、天野遠子の分解可能で、データベース的な要素を瞬時に判断することができる「オタク」に限られる。以上のように『文学少女と繋がれた愚者（フール）』を享受すると想定されている層はいわゆる「オタク」であった。プロットを抽出され換骨奪胎された「友情」は、大正時代から考えれば思いもよらなかった読者層を得たのである。これまでキャラ（特に天野遠子）が分解可能な要素の集合体であることを論じてきたが、『文学少女と

繋がれた愚者（フール）で扱われているのは、「青少年三人による三角関係の恋愛」「大宮の性格をなぞったようなキャラクターである芥川」の二つに過ぎない。つまりここでは「友情」のプロットと登場人物が抽出され、分解され、組み合わされたことで新たな翻案作品が生み出されているのである。キャラだけでなく、プロットすら分解可能な要素として組み合わせ、二次創作<sup>②</sup>すること、ここに文学作品の今日的な消費のあり方が窺える。

他に平成改元以降「友情」が大きく取り上げられたのが二〇一九（令和元）年から二〇二〇（令和二）年に上演された舞台「文豪とアルケミスト 異端者ノ円舞」<sup>③</sup>（脚本・なるみゆうせい、演出・吉谷光太郎）である。同舞台は二〇一六（平成二十八）年からDMMにて配信されている「文豪とアルケミスト」を原作としており、同作は実在の男性作家をキャラクター化し、文学をこの世から消そうとする「侵略者」なる敵と戦うというストーリーとなっている。武者小路はサービス開始の同年に実装され、「友情」も代表作とされている。舞台化第二弾となった「異端者ノ円舞」では「友情」が侵略者に侵略される筋書きの中で、武者小路と志賀直哉の関係性が中心に扱われている。第二十四場では登場する「文豪」が「友情」の解釈について議論を交わす<sup>④</sup>。

島崎藤村「そもそも、武者くんはどうして【友情】を書こ

うと思ったんだろうね」

国木田独歩「アンタも、【友情】の内容、よく知ってるだろ？」  
島崎藤村「脚本家・野島と、作家・大宮の間には固く結ばれた友情があった。それがとある人物の登場によって、失われてしまう」

芥川龍之介「その要約の仕方は語弊がある。どちらを失ってもなお前向きに逞しく生きていく様が描かれているんだ」  
島崎藤村「僕に言わせれば、人はそんなに強くはいられないけど、僕が著者ならば、失われたものの重さに絶望するという形で終わらせるかな」

芥川龍之「普通の、純文学の作家であればそんな悲しい結末にするだろうけど」

国木田独歩「そう、それだよ。武者小路はあえてしなかった。自分自身の、理想の【友情】に重ね合わせたんだろうな」  
島崎藤村「だけど本当は、心のどこかでひそかに武者くんも思っていたんじゃないかな？『親友である、あいつさえいなければ』と：」

〈中略〉

島崎藤村「主人公、野島はずっと大宮に憧れていた。大宮に対する思惑というのは、すなわち、志賀に対する思惑」  
芥川龍之介「それは違う」

島崎藤村「だけど現実とまったく関係ないとも断言はできないんじゃない？ いずれにせよ、武者くんにとって親友

というのは大きな影響を及ぼしてゐる」

このような劇中でかわされる中議論に登場する「友情」の解釈は、「友情」を武者小路と志賀の物語に重ね合わせているという点で、昭和二十年代以降の「友情」解釈を引き継いでいると言える。<sup>(2)</sup>しかし、問題は「友情」がキャラクター同士の関係性を強調する舞台装置として扱われている点である。新たにキャラクター化された武者小路と志賀を扱うにあたって、再度「友情」は武者小路と志賀の物語として解釈され消費されているのである。「文学少女」シリーズと同様に「文豪とアルケミスト」も文学の要素（作者のパーソナリティ、作品、他者との関係性）を分解され、再構築されてキャラクターとそれに付随する他のキャラクターとの関係性が構築されている。武者小路をキャラクター化するにあたって「友情」は利用されたのである。

### おわりに

おそらく執筆時に武者小路が想定した「友情」の読者は作中の野島と大宮の関係性に現実の武者小路と志賀の関係性を当てはめることができる程度には文壇周辺の事情に明るい人物を想定していたと考えられる。その背景には、文壇内で流行していた自身のバックボーンを演出する姿勢がある。しかしその想定とは裏腹に「友情」で注目されたのは作中における性道德観念、恋愛観、ひいては作中に表出された人間性であった。この部分

に注目される読みは長く読者共同体に共有され、戦後若者への性道德教育が下火になる昭和後期まで、作中の倫理観こそが「友情」で最も注目される部分だったと言つてよい。その読みに支えられ、「友情」は全集や選集をはじめとする大型版本から文庫本といった様々な形態・価格帯で広く流通し、その読者層も女子大生・児童・中等教育を受ける学生など若年層を中心に拡大した様子が刊行物からうかがえる。しかし、昭和から平成への改元を期に「友情」の刊行は停滞している。これにはおそらく若者の性道德に対して社会の関心が以前ほど向けられなくなったこと、そして出版不況により全集や選集などの大型版本が途絶え文庫での流通が中心となったことが指摘できる。一方で、「古典的」な「名作」として一定の評価を得ていた「友情」はサブカルチャーの分野でそのプロットを換骨奪胎して享受されることになる。文学作品のプロットや、作者とその周辺を二次創作しながら享受する今日的な文学の消費の傾向が「友情」の受容にも表れていると考えていいだろう。

本論では「友情」の執筆から今日に至るまでの受容のあり方を概観してきたが、執筆時から昭和二十年代での再評価までの時期がほぼ空白となっており、その時期についてはさらなる検討が必要である。その検討のためには「友情」だけでなく、武者小路自身が文壇、そして世間からどのような目を向けられていたかを更に広い視点から見なければならぬ。

注

- (1) 小山静子「第四章 女子学生批判が意味したもの」『戦後教育のジェンダー秩序』勁草書房、平成二十一年。
- (2) 武者小路実篤「後書き」『武者小路実篤全集 第五卷』新潮社、昭和三十年。
- (3) 同史料中に見られる「女学生」の読書調査については現在のところ確認できていない。
- (4) 以下の児童書の引用では可能な限り本文のルビを再現した。
- (5) 武者小路実篤「友情 ジュニア版日本文学名作選15」(偕成社、昭和四十年)。
- (6) 半田茂雄「読書のしかた——武者小路実篤「友情」の読解と鑑賞——」武者小路実篤『友情 新学社文庫5』一七六頁。
- (7) 筆者の片手落ちではあるが、本稿では史料収集において秀英出版から刊行された『国語 三』(昭和三十二年)と『国語現代編 一』(昭和三十八年)は現物を確認できなかったため、考察するのは実教出版から刊行された三冊と指導書二冊となる。
- (8) 昭和四十七年の指導書の参考文献の欄には亀井の書評は挙げられておらず、直接的な参考文献としては参照されなかったようである。
- (9) 稲井達也「『こころ』の授業実践史——教科書教材と学習指導の批判的検討」アンジェラ・ユー 小林幸夫 長尾直茂 上智大学研究機構『「アジア遊学194」世界から読む漱石「こころ」』平成二十八年、勉強出版 一六四頁。
- (10) 同上 一六四頁。
- (11) 「七 できればこの小説の全文を読み、各自の感想を述べ合ってみよ。」前掲四十七 八十六頁。
- (12) 実教出版編集部 編『現代国語 三 三改訂版 指導書』実教出版、昭和五十三年 二九七頁。
- (13) 同上 九十九頁。
- (14) 田近洵「戦後国語教育問題史「増補版」」大修館書店、平成十一年 一八一頁。
- (15) 佐野幹「山月記はなぜ国民教材となったのか」大修館書店、平成二十五年 一九一頁。
- (16) 東浩紀『動物化するポストモダン』(平成十三年、講談社)。
- (17) 同上 九十四頁。
- (18) 同上。
- (19) 同上。
- (20) 公式サイトでは武者小路について「白樺派の中心として周りを引っ張るお坊ちゃん。／文学以外にも絵画や演劇などにも広い才能を持つ。／世間知らずゆえの純真さから常に夢を追いかけて、計画性のない行動を見せては周りを困惑させるがその情熱に惹かれて応援する人も多い。／最終的には人を自分の望み通りに動かすことができる」と紹介している。文学傾向(ゲーム内の属性)では「純文学」に分類され、趣味嗜好を「理想のために働くこと」としている。 <https://bungo.dmmgames.com/>

news/161101\_02.html (閲覧日：令和元年十一月二十日)

- (21) 舞台「文豪とアルケミスト」製作委員会 監修『舞台文豪とアルケミスト異端者ノ円舞(ワルツ) 戯曲ノ書』二〇二〇年、小学館 九五頁。

- (22) 園田若瑳「武者小路実篤「友情」の創作から初期の受容の検討：読者層の創出」『青山語文』五十三卷、二〇二三年三月。

(そのだ・わかさ／本学博士後期課程)